自著を語る
―私と「美の殿堂」とのかかわり合い

松岡　將

私は、この7月初旬、『ワシントン・ナショナル・ギャラリー参百景』を刊行した。

この本は、近時の私の第1作『松岡二十世とその時代』、第2作『王道楽土・満洲国の「罪と罰」』、第3作『在満少国民望郷紀行』に引き続く、私の近時の第4作目。欧米美術品の宝庫であるワシントン・ナショナル・ギャラリーへの、1970年代の初め以来半世紀近くにもわたる私のささやかな思い入れを、なんとか、とりまとめたものである。そして、改めて考えてみると、この本の誕生も、すべての事象同様、やはり、必然と偶然のないまぜの結果なのであった。

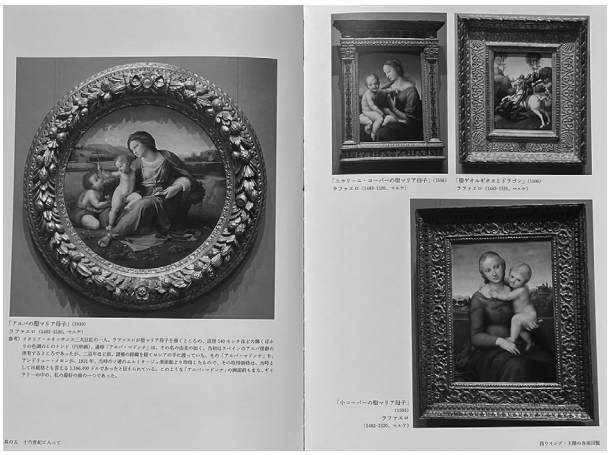
必然面ということで言えば、私は、1970年代の初め頃のこと、農林水産省から外務省に出向の上、主として日米間の農林水産関係業務を取り扱うため、在ワシントン日本国大使館勤務を命ぜられ、以来、丸4年のアメリカ在勤生活を送ることとなったのだが、それが、ことの始まりであった。北海道生まれで小学生時代のほとんどを、外地、満洲大陸で過ごして、戦後1年を経ての内地への引揚げ少年だった私にとって、大陸アメリカ暮らしは、なんとなく、肌に合うところのものだった。そして、生活文化の面をあげれば、さすがにアメリカの首都ワシントンともなれば、美術館、博物館、映画館、音楽会などなど、私がちょっと車を走らせれば、あちこち、いわば身近ですぐに用が足せたのだった。

そんな暮らしの中にあって、三十代後半でまだ知的好奇心旺盛だった私が、私とほぼ同じ年代である白亜の大理石の美の殿堂――アンドリュー・メロンがその設立を意図し、当時のアメリカ大統領、フランクリン・D・ルーズベルトとアメリカ議会とを動かしてその同意を得て、1937（昭和12）年7月に、ワシントンの中心のザ・モールの地に建設が開始され、1941（昭和16）年3月に開館された――ワシントン・ナショナル・ギャラリーのとりこになるのには、そう時間はかからなかった。

かくして、私的生活面では、他用のない週末の午後などに車を走らせギャラリーにいっては、当時その展示が開始されて間もないレオナルド・ダ・ビンチの「ジネブラ・デ・ベンチの肖像」を始め、中学、高校時代からそ

の名を聞き及んでいた巨匠たちの諸傑作をも、それこそ選り取り見取りで、ひとり心ゆくまで堪能するのを常としたのだった。

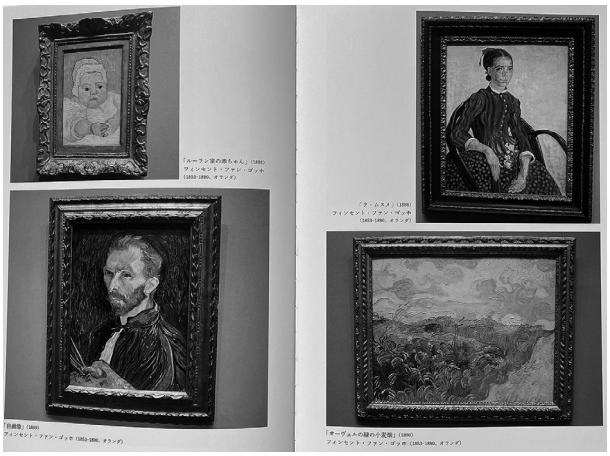
他方、公務の面にあっても、日本からの国会議員や政府関係の方々などの同伴接遇にあって、議員会館や農務省に近接するナショナル・ギャラリーは、アポイントとアポイントとの合間などにご案内するのには、その地の利からして、うってつけの場所でもあった。


「アルバの聖マリア母子」(1506)
ラファエロ (1483-1520、イタリア)
参考：イタリア・ルネッサンス二大巨匠の一人、ラファエロが聖マリア母子を描くことその、通算10センチ位上の聖くばかりの温厚のイエスと、付随的、通常「アルバ・マドンナ」は、その名の由来の如く、当初はスイッカ・アルバ家の依頼でアンブロジュー・ファッシ、1503年、当時25才過のルネッサンス、黄金期ようを迎えるその、その作陶期は、当時としては遅咲きと言えるも、1506年ファッシ過ぎたルネッサンス、このようなフィレンツェ「アルバ・マドンナ」の画成時も本生ギャラリーの中の、私の最好の逸品の一つであった。

「ニュリーニ・コーパーの聖マリア母子」(1508)
ラファエロ (1483-1520、マルケ)
「聖ゲオルギオスとドラゴン」(1506)
ラファエロ (1483-1520、マルケ)
「小コーパーの聖マリア母子」(1505)
ラファエロ (1483-1520、マルケ)
西ウイング・3階の各展示室

ナショナル・ギャラリーにあって過ごしたあまたの貴重な時間を含む丸4年のワシントン在勤生活を終えて帰国した私だったが、その後官職を離れてからも、国際関係の仕事に従事して、国際機関の理事会出席のためなど、晩年に至ってもワシントンを訪れる機会が多く、その都度、何とか時間を作ってはギャラリーを訪れ、旧知の諸傑作や新導入の作品に見入るのを常とした。その結果、このような機会に撮りためたギャラリー関連の写真が、数百枚にも及び、いずれ整理をせねばと思いつつ、果たせずにいたのだった。

そんな私が、神戸在の理化学研究所計算科学研究センターにあって、従来のスパコン「京（けい）」に替わる新スパコンを「富岳」とする、との命名発表を聞いたのが、昨年の5月の末頃のことであった。この命名の趣旨としては、葛飾北斎の有名な「富嶽百景」の「富嶽」にちなみ、かつ、新機が従来機「京」の百倍以上の性能を有するが故に「百景＝百京」とあやかって、新機を「富岳」とし、いただき高く裾野広くを目指す、とするものであった。


「ルーラン家の赤ちゃん」(1888)
フィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890、オランダ)
「ラ・ムスメ」(1888)
フィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890、オランダ)
「自画像」(1889)
フィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890、オランダ)
「オーヴェルの麦の小花畑」(1890)
フィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890、オランダ)

この命名話をきいた私は、そういえば「富嶽百景」ならぬ「ナショナル・ギャラリー百景」だってあるのではないかなと、偶然、思い付き、それが、思い出深いギャラリーの写真在庫の有意的整理の大作業を、昨夏から開始するきっかけとなったのだった。

このような難しくもあるがやり甲斐もある作業を重ねている中に、その数いつしか当初目標の百は過ぎて、2百はおろか3百に近づいてくるにつれて、その成果を自分一人のものとしておくのは、いかにももったいない、できればこれを多くの人々と共有することはできないかと考え、こころざしある出版社の編集協力を得て、なんとか現在の形での出版にまで、こぎ着けることができたのだった。

最後になるが、世界的なコロナ禍のさなかにあって本書が、ひとびとの心を静め慰め、そして将来への希望をいだくための一助となるのであれば、著者としてこれに過ぎたる喜びはない。